

平成21年 5月11日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18530536
研究課題名（和文） 対人不安における情報の利用可能性と認知バイアスに関する研究
研究課題名（英文） Studies of information availability and cognitive bias
for social anxiety disorder
研究代表者
生和 秀敏（SEIWA HIDETOSHI）
広島大学・大学院総合科学研究科・名誉教授
研究者番号：90034579

研究成果の概要：

自己注目は対人不安特有の認知バイアスであり、不安の維持・増大と関係している。本研究は、対人不安の自己注目時の認知処理について検討した。対人不安者は、社会的状況で自己の内的情報に注意を向けやすくなるだけでなく、注意の方向も不安定になる。情報の処理容量は限られていることから、他者のネガティブな動作に気づきやすい注意バイアスと、否定的に評価しやすくなる解釈バイアスが生じる。その結果、スピーチや会話のパフォーマンスも低下することになる。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,700,000 | 0 | 1,700,000 |
| 2007年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2008年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,500,000 | 540,000 | 4,040,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：心理的障害、対人不安、認知情報処理、自己注目、認知バイアス

1. 研究開始当初の背景

人前でスピーチをするときや初対面の人との会話をするときには、誰もが緊張し、人から自分がどう思われているだろうかと気になる。このように、他者のまなざしにさらされることで生じる懸念を対人不安と呼んでいる。高対人不安者は、社会的状況を否定的・脅威的であると評価する傾向があり、他者から否定的に評価されるのではないかという認知バイ

アスが認められる。社会不安状況で自分の性格や悩み、身体反応といった内的情報に注意が向きやすくなる自己注目状態となり、それが対人不安を維持・増大させる働きをしているといわれている。

社会的状況において、他者の言動やまなざしが引き金となって評価懸念が生じることから、対人不安者にとっての脅威刺激は外的に存在していることになる。しかし、自分の内

的状态に対して注意を向ける自己注目も引き起こされる。人間の情報処理リソースには限界があり、多くの情報を処理することができない。つまり、他者という外的情報と自己の内的情報に同時に注意を向けると処理リソースが競合することになり、両情報を同時に処理することができない。そのため、どちらかの情報を優先的に処理していると考えられる。

Clark & Wells (1995) は、社会的状況におかれたことがきっかけとなり、自己注目が生じると考えている。つまり、外的情報から内的情報へと注意の方向がシフトすると考えているのである。しかしそうであるならば、スピーチをしたり会話をしたりしているときでも、相手の言動やまなざしが気になることや、それで不安が高まったり和らいだりすることの説明が難しくなる。一方、Rapee & Heimberg (1997) は、内的情報だけでなく外的情報にも注意を向けていると考えている。他者という外的情報に注意を向けているといっても、スピーチや会話をしながらであり、限られた処理リソースでは、すべての処理を円滑に行うということとはできない。つまり、注意の欠落が生じることや、スピーチや会話に割くことの出来る処理リソースが不足することになる。限られた処理リソースで内的・外的情報に注意を向けるためには、同時ではなく継時的に注意をシフトさせなければ難しいだろう。つまり、注意の方向を随時切り替える不安定な状態になると予想できる。しかも、内的情報への注意処理が優先される中で外的情報にも注意を向けなければならないために、多くの処理リソースを使うことになり、スピーチや会話に要する処理が不足し、パフォーマンス低下を引き起こすと予想できる。

本研究では、対人不安者がスピーチや会話といった社会的状況において、外的情報や内的情報に対してどのように注意を向けているのか、注意の偏りや拡散が認められるのかについて、実験的検討を行うことを目的とした。あわせて、限られたリソースでの処理のため、その影響がスピーチや会話のパフォーマンスに及ぼす影響についても検討する。

2. 研究の目的

社会的状況における対人不安者の注意の方向性とパフォーマンスに関する検討を行うため、4つの研究を行った。人の処理リソースには限りがあり、同時に複数の処理を並行してできないために、自己注目により内的情報に注意が向くことで、外的情報への注意やパフォーマンスに割くことのできる処理リソースは低下することになる。本研究は、自己注目がなされる状況での外的情報の評価やスピーチや会話のパフォーマンスを調べることで、社会的状況における対人不安者の情報処理の特徴を明らかにすることを目

的とした。以下の4つの研究は、上記の目的を達成するために計画されたものである。各研究の目的を以下に記す。

(1)研究1：注意の方向と安定性の検討

社会的状況としてスピーチ場面を設定し、社会不安高者の注意が内的情報に向けられやすいのか、外的情報に向けられやすいのか、それとも安定しないのかについて検討することを目的とした。

(2)研究2：他者の動作と解釈バイアスの検討

スピーチ場面を用いて、スピーチ中の他者の動作をビデオフィードバックすることで注意の操作を行い、不安やパフォーマンスの認知、他者の示す動作の解釈に及ぼす影響を検討することを目的とした。

(3)研究3：自己注目とパフォーマンスの検討

会話場面を社会的状況として用い、カメラの設置と教示により自己注目の程度を操作し、自己注目の違いが会話パフォーマンスや他者への注意、不安反応に及ぼす影響を検討することを目的とした。

(4)研究4：PEPと対人不安認知の検討

社会的場面を経験した後に、そのことをいろいろ考える PEP (Post-event Processing) を検討の対象とした。客観的に現実を振り返るような PEP を行わせることで、不安やスピーチパフォーマンス、自己評価や動機づけに及ぼす景況を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

実施した4つの実験の方法について、順次説明する。

(1)研究1：注意の方向と安定性の検討

①実験参加者：大学生 481名に対して Fear of Negative Evaluation Scale (FNE)を測定し、上位・下位 30%で実験参加の同意の得られた、社会不安高群 13名と低群 11名を対象とした。
②実験手続き：5分間のスピーチを行わせ、それを隣室にいる2名の評価者が評価をする状況を設定した。評価者の様子は、参加者の前に置かれたモニターTVに映し出された。評価者はポジティブ動作・中性動作・ネガティブ動作を行い、参加者がスピーチ中にどの程度気づくかを測定した。
③測定指標：主観的不安として STAI-S、生理指標として抹消血流量と脈拍数を用いた。注意の方向性として FAQ、自作の不安定さ項目、動作の検出率を用いた。

(2)研究2：他者の動作と解釈バイアスの検討

①実験参加者：大学生 31名 (自己注目条件 10名、他者注目条件 11名、他者注目+ビデオ

フィードバック (VF) 条件 10 名)。

②実験手続き：初対面に異性の前で、3 分間のスピーチを 2 回行わせ、不安反応や他者の動作の気づきと感情か評価を行わせた。1 回目のスピーチ前に条件操作を行い、自己注目条件では、「スピーチ中は自分自身に注目すること」を、他者注目条件と他者注目+VF 条件では「聞き手の反応に注意を向けること」を教示した。1 回目のスピーチ後、他者注目+VF 条件では、聞き手の様子を 2 分間にイメージさせた後に、ビデオにより聞き手の様子をフィードバックし、イメージしたことと実際との違いを実感させた。

③測定指標：主観的不安、注意の方向性として FAQ、スピーチ中のパフォーマンスの認知、動作の気づきと否定的評価の程度、聞き手の印象について測定した。

(3)研究 3：自己注目とパフォーマンスの検討

①実験参加者：大学生 737 名に対して Social Interaction Anxiety Scale (SIAS)を実施し、同意の得られた対人不安高群 24 名、低群 24 名を対象に実験を実施した。

②実験手続き：実験参加者の前にカメラを置いて自己注目を促す操作を行った。自己注目条件では、「会話中に不安が高まるとそれが表情や態度、音声に現れるので、それをカメラで録画する」と教示して、自己注目を促した。外的注目条件では、「カメラで録画をするのは安全確認のためなので意識しないように」と教示した。なお、両条件ともに、会話内容について質問するのでその内容についてよく覚えておくよう教示した。会話課題は「ゴミ問題」で、異性の実験協力者と 10 分間会話させた。実験協力者は、30 秒以上沈黙が続いたときのみ発言をし、会話では質問を中心に行うよう統制した。実験協力者は会話中に、ポジティブ動作・中性動作・ネガティブ動作を各 2 回ずつ行わせ、その提示間隔は約 30 秒であった。

③測定指標：主観的な不安・緊張、生理指標である血圧、血流量、発汗量を測定した。注意の方向性として FAQ と注意の不安定性を測定した。会話のパフォーマンスは、主観的評価として Behavioral Check List (BCL)、行動指標として自発的会話数、平均沈黙時間、沈黙回数、平均発話時間を測定した。

(4)研究 4：PEP と対人不安認知の検討

①実験参加者：大学生 669 名に対して Social Phobia Scale (SPS)を実施し、同意の得られた 48 名(高不安ネガティブ条件 12 名、高不安現実条件 12 名、低不安ネガティブ条件 12 名、低不安現実条件 12 名)を用いた。

②実験手続き：3 分間のスピーチを行わせ、その内容をカメラとマイクでスピーチをモニターし、大学院生 2 名が評価するという実

験設定とした。評価している様子は、モニター TV で実験参加者は見ることができた。スピーチ後の思考 (PEP) が不安に及ぼす影響を見るため、エッセイに記入させることで思考内容の操作を行った。エッセイに記入させる内容は、ネガティブ条件ではスピーチの失敗、失敗内容、失敗した際の評定者の態度、失敗により評価がどう変化したかについて書かせた。現実条件では、スピーチで言い残したこと、スピーチで良かったこと、評定者がどのような動作をしていたか、どのような評価をされたと思うかについて書かせた。

③測定指標：会話における言語能力がエッセイやスピーチに影響していないかを確認するために、京大 NX15 知能検査から言語検査を実施した。評定者の印象は自作項目により測定した。不安反応には、主観的不安感(多面的感情状態尺度と STAI の不安項目)、生理反応(血圧、末梢血流量、脈拍)を用いた。スピーチについては、2 名の評価者により Behavior Assessment of Speech Anxiety (BASA) を用いて評価した。また、自己評価として BASA および自己イメージを測定した。その他、自己効力感、動機づけ、スピーチ後の思考 (Post-event Processing Questionnaire: PEPQ)、エッセイ内容についても分析した。

4. 研究成果

実施した 4 つの研究で得られた成果を、研究別に述べる。

(1)研究 1：注意の方向と安定性の検討

①不安喚起

対人不安高群・低群ともに、主観・生理に関係なく不安反応は、ベースよりも予期場面で、予期場面よりのスピーチ場面で増大しており、不安が喚起されていた。主観指標においては、対人不安高群が低群よりも強い不安を感じていた。

②注意の方向性

対人不安高群は低群よりも内的情報に対して注意を向けていた [$F(1,22) = 18.76, p < .001$]。一方、高群は低群よりもスピーチ中の外的情報に注意を向けていることがわかった [$t(22) = 3.6, p < .005$]。対人不安者にとって、評価者の存在が外的情報として重要な意味を持つことがわかった。

注意の不安定性について、高群・低群ともにスピーチ場面で注意が不安定になっていた。FNE 得点を統制した相関分析を行ったところ、スピーチ場面では不安の増大とともに注意の不安定性が増加することが示された ($r = .42, p < .05$)。

③動作の検出と評価

スピーチ場面における評価者の動作の検出は、中性動作よりもネガティブ動作の方が多く気づかれていた [$F(2,44) = 7.93, p < .001$]

が、対人不安の程度による違いは認められなかった [$F(1, 2)=1.98, n.s.$]。不安が高まると、ネガティブ情報に注意が向きやすくなることがわかる。

④研究1のまとめ

対人不安高群は、内的情報に注意を向けやすく（自己注目しやすい）、かつ注意が不安定になっているが、ネガティブ動作への気づきには結びついていなかった。むしろ、不安の高まりがネガティブ動作の高まりと関係していた。

(2)研究2：他者の動作と解釈バイアスの検討

①注意の方向性

自己注目条件に比べて他者注目+VF条件は、聞き手に注目していたが、他者注目条件と自己注目条件では違いが認められなかった。ビデオフィードバックにより、自己注目が減少するといえる。

②不安の喚起

1回目よりも2回目のスピーチで不安が低下する傾向が認められたが [$F(3, 84)=10.56, p<.01$]、条件群の違いは認められなかった。

③パフォーマンスの認知

1回目よりも2回目のスピーチで自然に振る舞えたと認知していた [$F(1, 28)=9.88, p<.005$]。他者注目+VF条件、他者注目条件、自己注目条件の順で、自然に振る舞えたと認知できていた [$F(2, 28)=5.34, p<.05$]。ビデオフィードバックすることで、正確な情報を入力でき、パフォーマンス向上に結びついたと感じていることがわかる。

④動作の検出と解釈

相手の動作は、自己注目条件よりも他者注目+VF条件でより多く検出する傾向が認められた [$F(2, 28)=3.28, p<.10$]。ポジティブ動作・ネガティブ動作・あいまいな動作のいずれにおいても、1回目のスピーチよりもビデオフィードバック時でより多くの動作が検出されていた [$ts(9)=4.58\sim 6.09, ps<.01$]。

動作の解釈において、ポジティブ動作では、1回目よりも2回目のスピーチで、より自分に対する否定的な動作だと評価する傾向が認められた [$F(1, 16)=3.90, p<.10$]。他者注目+VF条件で2回目スピーチ中のネガティブ動作を自分に対する否定的な動作だと評価する傾向にあった [$F(2, 13)=3.05, p<.10$]。ビデオフィードバックすることで、他者情報が多く伝わり、結果として否定的な動作だと評価する傾向にあったといえる。

⑤研究2のまとめ

他者に注目を向ける教示を行い、他者の動作をビデオフィードバックすることで、自己注目が減少し、スピーチ・パフォーマンスが向上したと自覚するものの、検出したネガティブ動作をより否定的に評価する傾向が認められた。

(3)研究3：自己注目とパフォーマンスの検討

①不安喚起

主観的な不安は、会話中で最も高く [$F(2, 88)=97.78, \epsilon=.82, p<.001$]、対人不安低群よりも高群で高いことがわかった [$F(1, 44)=9.05, p<.01$]。生理反応では、収縮期血圧・拡張期血圧・心拍数・発汗量・抹消血流量とともに、会話中で覚醒が高まっていた [$Fs(2, 88)=4.89\sim 25.14, ps<.05$]。以上のように、会話中で不安が高まっているが、群間差は主観反応のみで認められた。

②注意の方向性

対人不安高群が低群よりも、内的情報に注意を向けていた [$F(1, 44)=12.05, p<.01$]。また、高群において内的注目条件で内的注意が高くなる傾向が示された [$F(1, 44)=3.54, p<.10$]。一方、外的注意については条件差が認められなかった。また、高群が低群よりも注意の方向が不安定であることがわかった [$F(1, 44)=18.93, p<.001$]。

③会話パフォーマンス

主観的なパフォーマンスは、群間差は認められず、外的注目条件よりも内的注目条件で低く評価されていた [$F(1, 4)=6.97, p<.05$]。自発的会話数は、外的注目条件で多く [$F(1, 44)=4.51, p<.05$]、沈黙時間は自己注目条件で長かった [$F(1, 44)=5.18, p<.05$]。このように、自己注目することで会話パフォーマンスが低下することがわかった。

④動作の検出

相手の動作の検出において、ネガティブ動作・ポジティブ動作には条件差は認められなかったが、中性動作の検出は外的注目条件で正確であった [$F(1, 44)=3.91, p<.10$]。

⑤研究3のまとめ

対人不安高群は、内的情報に注意を向けやすく、しかも注意の方向性は不安定であることがわかった。内的情報に注目を向けることで会話パフォーマンスは、主観的にも客観的にも低下することがわかった。

(4)研究4：PEPと対人不安認知の検討

①不安喚起

対人不安高群が低群よりも不安感が高く [$F(1, 44)=19.48, p<.01$]、不安喚起後やスピーチ中の不安が高く、PEP後に低下することがわかった [$F(3, 132)=120.39, \epsilon=.83, p<.01$]。抑うつ感は、高群で高く [$F(1, 44)=9.46, p<.01$]、ベースよりも不安喚起後・スピーチ中・PEP後で高くなっていた [$F(3, 132)=78.55, \epsilon=.89, p<.01$]。生理指標のSBP・DBP・HR・抹消血流量のいずれにおいても、ベースよりもスピーチ中で覚醒が高まっていることがわかったが、群間差は認められなかった。

②スピーチ・パフォーマンス

BASAによる客観評価では、ネガティブ条件よりも現実条件でスピーチ・パフォーマンス

スが低いことがわかった [$F(1,44)=4.39, p<.05$]. BASAによる自己評価では、高群が低群よりもパフォーマンスが低いと自己評価していることがわかった [$F(1,44)=11.59, p<.01$].

③PEPの程度と内容

PEPQの得点から、高群が低群よりもPEPを多く行っていることがわかった [$F(1,44)=14.54, p<.01$]. 高群がネガティブ思考 [$F(1,44)=10.79, p<.01$]と現実思考 [$F(1,44)=10.64, p<.01$]を多く行っていることがわかった。しかし、思考的回避においては群間差が認められなかった。このように、対人不安高群が積極的にPEPを行っていた。

エッセイに書かれた内容を分析したところ、高群は低群よりもネガティブ思考を行う傾向 [$F(1,44)=4.00, p<.10$]と現実志向をすること [$F(1,44)=8.09, p<.01$]がわかった。ネガティブ条件ではネガティブ思考が多く行われ [$F(1,44)=48.34, p<.01$], 現実思考条件では現実思考を多く行うこと [$F(1,44)=37.76, p<.01$]が示された。このように、エッセイの間により誘導された思考をしやすい。

④研究4のまとめ

対人不安高群はPEPにおいてネガティブ思考や現実思考を多く行い、スピーチ・パフォーマンスも低いと自己評価していた。ネガティブ思考を誘導するネガティブ条件でパフォーマンスが高く、予想と逆の結果であった。

(5)考察：対人不安における注意処理機構

4つの研究結果から、対人不安の注意機構と認知処理は以下のように考えられる。

対人不安者が社会的状況におかれると、他者の存在により他者から否定的に評価されるのではないかと解釈することで、自分の身体状態や思考、行動に過剰に注意が向き、自己注目状態となる。そのことで処理リソースが占有されてしまい、残されたリソースで他の処理を行わなければならない。そのため他者へ十分な注意を向けることができなくなり、注意の転換が起きる不安定な状態となる。限られたリソースで他者の情報を有効に処理するため、脅威情報に注意を向ける注意バイアスが生じ、それが否定的な評価を強めてしまうことになる。自己注目と拡散した注意状態のため、スピーチや会話に割くリソースが減少するため、パフォーマンス低下をもたらすことになる。それを自覚することで、さらに自己評価を低めてしまい、他者から否定的に見られるのではないかと誤った解釈をしてしまうのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

- ① Okajima, I., Kanai, Y., Chen, J., & Sakano, Y. Effects of safety behaviour on the maintenance of anxiety and negative belief in social anxiety disorder. *International Journal of Social Psychiatry*, 査読有, 55, 71-81, 2009.
- ② 岡島 義・金井嘉宏・笹川智子・金澤潤一郎・秋田久美・陳 峻雯・坂野雄二 社会不安障害尺度 (Social Phobia and Anxiety Inventory 日本語版) の開発. 行動療法研究, 査読有, 34, 297-309, 2008.
- ③ 笹川智子・金井嘉宏・陳 峻雯・嶋田洋徳・坂野雄二 児童期のレトロスペクティブな行動抑制傾向測定尺度 (The Retrospective Self-Report of Inhibition) 日本語版の開発. 行動療法研究, 査読有, 34, 285-295, 2008.
- ④ 藤原裕弥・岩永誠 不安における注意の処理段階に関する研究. 行動療法研究, 査読有, 34, 101-112, 2008.
- ⑤ 岡島 義・金井嘉宏・陳 峻雯・坂野雄二 日本語版 Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) の因子構造—確認的因子分析による検討—. *精神医学*, 査読有, 49, 829-835, 2007.
- ⑥ 岡島 義・金井嘉宏・陳 峻雯・坂野雄二 社会不安障害における恐怖場面内での回避行動の評価—Avoidance Behavior In-situation Scale の開発—. 行動療法研究, 査読有, 33, 1-12, 2007.
- ⑦ 岡島 義・金井嘉宏・金澤潤一郎・坂野雄二 社会不安障害に対する有効な治療法の展望—脳画像研究の観点から—. *精神科治療学*, 査読有, 22, 447-457, 2007.
- ⑧ 金井嘉宏・笹川智子・陳 峻雯・嶋田洋徳・坂野雄二 社会不安障害傾向者と対人恐怖症傾向者における他者のあいまいな行動に対する解釈バイアス. 行動療法研究, 査読有, 33, 97-110, 2007.
- ⑨ 藤原裕弥・岩永誠・生和秀敏 不安と抑うつにおける認知バイアスに関する研究. 行動療法研究, 査読有, 33, 145-155, 2007.
- ⑩ 岡島 義・金井嘉宏・陳 峻雯・坂野雄二 社会不安障害のアナログ研究における群設定のための基準. *北海道医療大学心理学部研究紀要*, 査読有, 2, 7-12, 2006.
- ⑪ 高橋高人・百々尚美・大澤香織・金井嘉宏・坂野雄二 児童におけるリラクゼーションを用いたストレスマネジメントの効果. *ストレスマネジメント研究*, 査読有, 3, 35-40, 2006.
- ⑫ 金井嘉宏・坂野雄二 社会不安障害患者の生理的反応に関する研究の展望. 行動療法研究, 査読有, 32, 117-129, 2006.

〔学会発表〕(計15件)

- ①佐藤文彦 大学生の洗浄強迫傾向における潜在的連合に関する検討—強迫状態が潜在的連合に及ぼす影響—。日本認知療法学会第8回大会, 2008年11月3日, 日本教育会館。
- ②佐々木晶子 社会不安の記憶構造と不安反応の関連。日本認知療法学会第8回大会, 2008年11月3日, 日本教育会館。
- ③佐々木晶子 社会不安者の自己・他者に対する潜在的評価と不安反応の関連。日本心理学会第72回大会, 2008年9月19日, 北海道大学。
- ④金井嘉宏 社会不安者に対するビデオフィードバックと他者からのフィードバックの併用効果。日本心理学会第72回大会, 2008年9月19日, 北海道大学。
- ⑤佐々木晶子 社会不安障害の記憶構造に関する検討—記憶構造の顕在的連合・潜在的連合と不安反応の関連—。日本行動療法学会第33回大会, 2007年11月30日, 神戸国際会議場。
- ⑥佐藤文彦 大学生の洗浄強迫傾向における潜在的連合に関する検討—不安状態における潜在的連合の活性化について—。日本行動療法学会第33回大会, 2007年11月30日, 神戸国際会議場。
- ⑦金井嘉宏 社会不安のサブタイプと生理的反応に対する認知の歪みの関係。日本行動療法学会第33回大会, 2007年11月30日, 神戸国際会議場。
- ⑧佐々木晶子 post-event processing が社会不安に及ぼす影響。日本認知療法学会第7回大会, 2007年10月23日, 品川区立総合区民会館。
- ⑨佐藤文彦 大学生の洗浄強迫傾向における潜在的連合に関する検討。日本認知療法学会第7回大会, 2007年10月22日, 品川区立総合区民会館。
- ⑩金井嘉宏 スピーチに対する自己評価と他者評価のズレ。日本心理学会第71回大会ワークショップ, 日本心理学会第71回大会, 2007年9月19日, 東洋大学。
- ⑪佐々木晶子 反すうが抑うつ情動処理に及ぼす効果。日本行動療法学会第32回大会, 2006年10月25日, 品川区立総合区民会館。
- ⑫金井嘉宏 社会不安障害患者の生理的反応に対する解釈バイアスへの集団認知行動療法の効果—ビデオフィードバックに焦点をあてて—。日本行動療法学会第32回大会, 2006年10月25日, 品川区立総合区民会館。
- ⑬佐藤文彦 洗浄強迫者の潜在的連合に関する検討—Implicit Association Test (潜在連合テスト)を用いて—。日本行動療法学会第32回大会, 2006年10月24

日, 品川区立総合区民会館。

- ⑭佐藤文彦 強迫的信念における評価の歪みに関する検討—強迫的信念が認知症状と強迫行為に及ぼす影響について—。第6回日本認知療法学会, 2006年10月8日, 東京大学。
- ⑮金井嘉宏 社会不安者の解釈バイアスに対するビデオフィードバックの効果。佐藤健二・陳峻雯・杉浦義典 社会不安障害と対人恐怖症: 視覚的刺激の役割。第6回日本認知療法学会自主企画シンポジウム, 2006年10月8日, 東京大学。

〔図書〕(計5件)

- ①金井嘉宏・坂野雄二 行動的家族療法。内山喜久雄・坂野雄二(編) 認知行動療法の技法と臨床, 日本評論社, 2008, 57-65。
- ②金井嘉宏 社会不安障害。内山喜久雄・坂野雄二(編) 認知行動療法の技法と臨床, 日本評論社, 2008, 180-188。
- ③金井嘉宏 社会不安障害患者の生理的反応に対する認知の歪みに関する研究。風間書房, 2008, 総ページ数122。
- ④金井嘉宏・大澤香織 問題解決療法。坂野雄二・丹野義彦・杉浦義典(編著) 不安障害の臨床心理学 東京大学出版会, 2006, 207-210。
- ⑤岩永誠 「特定の恐怖症」。坂野雄二・丹野義彦・杉浦義典(編著) 不安障害の臨床心理学。東京大学出版会 2006, 109-124。

6. 研究組織

(1)研究代表者

生和 秀敏 (SEIWA HIDETOSHI)
広島大学・大学院総合科学研究科・名誉教授
研究者番号: 90034579

(2)研究分担者

岩永 誠 (IWANAGA MAKOTO)
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号: 40203393

金井 嘉宏 (KANAI YOSHIHIRO)

広島大学・大学院総合科学研究科・助教
研究者番号: 60432689
(2007, 2008年度)

(3)連携研究者

藤原 裕弥 (FUJIHARA YUYA)
東亜大学・総合人間・文化学部・准教授
研究者番号: 20368822
(2006, 2007年度は研究分担者)